

古高ドイツ語における対語 (Wortpaare) 1

—— Otfrid における inti と joh による半詩行内対語を中心に ——

飯 嶋 一 泰

0. 目的

古高ドイツ語（以下 Ahd. と略）における対語 (Wortpaare) のあり方を、Otfrid von Weissenburg の Evangelienharmonie（南ラインフランク方言；865/70年ごろ完成）における接続詞 inti と joh による並列の分析を軸として、考察する。ここで扱うのは、狭い意味での慣用対語 (Paarformeln/ Zwillingsformeln) ではなく、その場かぎり (ad hoc) の語法も含めた広い意味での対語である。それは、両者の区別が、死語で資料も不十分な Ahd. では困難ということもあるが、対語のあり方を分析する際に、慣用化・固定化しているものに限定するのが必ずしも得策ではないからである。むしろ、臨時的語法の分析を通して、対語に備わる属性が浮かび上がることもあろう。ただ、inti/joh を伴う全用例を扱うことは適切ではない。inti/joh には、現代語の und と同じく、語や語句（文肢）のみならず、文（主文・副文）をも並列させる機能がある。文を並列させている事例はもちろん対「語」とは言えないので除外するとして、語句の並列の場合でもそれらが相当に長く、拡張（修飾等）されている場合は対語としての典型性は低くなる。典型的な対語は「名詞 und 名詞」「形容詞 und 形容詞」「副詞 und 副詞」「前置詞句 und 前置詞句」などの簡潔な形態を取る。しかし、どの程度までの拡張を許容するかについて客観的な線引きをすることは困難なので、小論では半詩行 (Halbvers) 内に現れる対語に限定することで、非典型的事例を排除する。

第1章では、inti と joh の用法について、Otfrid におけるそれぞれの例証数とそれらによる半詩行内対語の例証数の照合、Ahd. の他文献を含めた用例の検討、を通して考察する。第2章では、Otfrid が半詩行内で用いた対語の全例証を挙げ、それらの特徴・傾向を概観する。第3章では、いくつかの対語に関して、Otfrid 以外の Ahd. 文献における例証、中高ドイツ語 (Mhd.) や新高ドイツ語 (Nhd.)、さらにはゲルマン諸語における対応表現と比較対照する。第4章では、以上の分析・考察結果を踏まえ、Otfrid および Ahd. における対語の特質に関する（暫定的）結論を出す。なお、今回は第2章まで掲載し、第3章以下は次輯（以後）に継続する。

1. Otfrid における inti と joh の用法

Ahd.には、Nhd.の並列接続詞 und に意味的・用法的におおむね対応する2つの接続詞が存在した。inti と joh がそれらである⁽¹⁾。inti は方言や文献により anti、enti、unti などの異形を持ち、unti から Mhd.の unde、さらには Nhd.の und が発展した。この語は、古ザクセン語 (As.) endi、古フリジア語 (Afries.) and(a)、古英語 (Ae.) and などいわゆる西ゲルマン語に広く分布する他、古アイスランド語 (Aisl.) en(n) „und, aber“も同起源と見なされている。語源は不確定で、Kluge/Mitzka (1967: 803)はサンスクリット語 átha „darauf, dann“と結びつけ、Kluge/Seebold (2002: 941)は同じく ánti „gegenüber, vor“とつながる可能性を指摘している。一方、joh は同義のゴート語 (Got.) jah、つまり間投詞 ja と後接辞-uh (=ラテン語-que) の融合形におそらく対応する⁽²⁾。この語は Mhd.に joch として継承されるが、使用頻度は下がり、初期新高ドイツ語 (Fnhd.) では東中部ドイツ方言やアレマン方言で „auch, auch immer“の意味の副詞として用いられるに過ぎない (Anderson/Goebel/Reichmann: Bd.8, Sp.381ff.)。

このように、大きな流れで見ると、joh は inti に徐々に駆逐されてゆくわけだが、少なくとも Ahd.において両者は競合している。とはいえ、一般には、Ahd.においても、inti が多数派を占める文献が多い。特に、Tatian (東フランク方言; 830年頃) は、比較的古い成立にもかかわらず、2700例以上の inti に対して joh はわずか4例しか用いていない (Karg-Gasterstädt/Frings: Bd.4, Sp.1631 u. 1819)。逆に、joh が優勢な文献として挙げられるのが Otfrid である。Shimbo (1990: 92 u. 106ff.)によると、ここでは133例の inti に対して、joh はその10倍近い1250例が使用されている。たしかに、Otfrid は脚韻による叙事詩であり、またオリジナル作品とはいえラテン語による福音書や聖書註解を下敷きにしている部分が少なくない。その点を考慮しつつ、「Otfrid における」という限定付きで、まずは inti と joh の用法の相違を見てゆきたい。

その手がかりとして、Otfrid が inti と joh をそれぞれどの程度の割合で対語の形成に用いているかを調べた。その際、前章で述べた事情から、半詩行内で完結している対語に限定した。その結果は次ページ、表1のとおりである。

総例証数で見ると inti は133例で、joh の十分の一強に過ぎないが、そのうち半数近くの56例が半詩行内対語を形成している。一方、joh は1250もの例証があるにもかかわらず、半詩行内対語において用いられているのは約1割の134例のみである。見方を変えると、joh は、ほとんどの事例において半詩行あるいは長詩行の冒頭に立ち、Zäsur、さらには詩行を超えた並列表現を形づくっている。それに応じて、文と文を接合する事例も多くなっていると思われる (この点はカウントしていないが)。一方、inti は半詩行・長詩行の冒頭に立つケースが比較的少なく、より小さい単位での並列表現、つまり語と語、ないし語句と語句を結ぶ際に好んで投入される傾向があるようだ。Erdmann (1973: Bd.1, 40f.)も同趣旨の言及をしている。これは、次章の表2お

表1 : Otfrid における inti と joh の例証数、inti と joh による半詩行内対語の例証数

	inti の例証数 (A)	inti による 半詩行内対語 (B)	B ÷ A	joh の例証数 (C)	joh による 半詩行内対語 (D)	D ÷ C
Ad Ludowicum	0	0	—	12	1	8.3%
Ad Salomonem	1	1	—	7	0	—
Liber 1	38	10	26.3%	212	22	10.4%
Liber 2	21	6	28.6%	223	27	12.1%
Liber 3	22	12	54.5%	253	21	8.3%
Liber 4	27	11	40.7%	265	20	7.5%
Liber 5	24	15	62.5%	253	42	15.8%
Ad Hartmuat	1	0	—	25	1	4.0%
合計	133	56	42.1%	1250	132	10.6%

*inti には int および intiz (=inti iz) を含む。inti/joh の例証数が10例以下の項は、割合記載をしない。

よび表3に挙げられている例の中で「A および B、ならびに C」⁽³⁾ という二重の並列構造をなすもの（備考欄に#印を付した）の多数が、A inti B / joh C（スラッシュは Zäsur あるいは改行を表す）という形を取っていること、つまり、より小さな単位（半詩行内の）並列には inti を用い、より大きな単位（半詩行を超える）並列には joh を用いている事実とも平仄が合う。たとえば、1-17-065の Myrrun inti wirouh / joh gold scinantaz ouh、あるいは S-030の... grap / joh hus inti hof など、計11例がこれに該当する。その反対のケース、つまり A joh B / inti C もあることはあるが、2-04-083 Era joh thiur richi / inti manag guallich 他 の 4 例が数えられるのみであり、しかもこの例のように詩脚の要請による (jóh thiur「強弱」が inti thiur「強弱弱」より好ましいため) と考えられる場合もある。

以上のように、こと Otfrid に限って見れば、用法において比較的明瞭な相違がある inti と joh だが、Ahd.の他の資料を調べてみると、事情はそう単純でないことがわかる。たとえば、Isidor (フランク方言? ; 790/800年ごろ) では、27,13 ... endi dhea burc ioh ghelstar fyrodhant liudi mit dhemu zuohaldin herizohin (= ... et civitatem et sacrificium dissipabit populus cum duce venturo) のように、文の並列が endi (=inti) によって、語（語句）の並列が ioh (=joh) によってなされており、Otfrid の傾向とは対照をなしている（他に 4 例：26,6; 27,7; 27,10; 27,22）。これらの用例を踏まえて、Isidor 刊本の編者 Hench は、巻末の Glossar (S.155) で、ioh が endi よりも緊密な名詞間の結びつきを示すとしている。これに対して、Behaghel (1928: 200) は、両者の意味が全く同じであり、相違は joh がより古く廃れつつある語であったのに対して、inti がそれに取って代わる、より新しい語であっただけだと述べている。

Otfrid が joh を好んだのは、あるいはそれが当時すでに雅語化し、日常的な inti よりも詩の言葉にふさわしいと感じたからかもしれない。ラテン語原文の直訳に近い淡々とした散文である Tatian に joh がほとんど使われていない事実と照らしあわせると、ますますそう考えたくなる。

なお、Tatian における 4 例の joh は通常の et ではなく、etiam „sogar“ (67,3 = L 10,17; 145,17 = Mt 24,24) あるいは et ... et ... „sowohl ... als auch ...“ (170,6 = J 15,24) の訳として用いられている。このことと、語源的に間投詞 ja に由来する（あるいは jouh < ja ouh と解釈されうる）ことから、joh が inti よりも強意的なニュアンスを持ち、それがキリストの生涯を歌う叙事詩の高揚した文体にふさわしかった、と想像することもできよう。

2. Otfrid における半詩行内対語

まず、Shimbo (1990: 92 u. 106ff.) を利用して、Otfrid に見られる inti と joh を用いた半詩行内対語（半詩行の枠を超えない対語）の例証をすべて挙げる。inti による対語を表 2 に、joh による対語を表 3 にまとめた。表 1 からも見えて取れることだが、inti によるものが計 56 例、joh によるものが 132 例ある。これらの数値は、inti/joh が半詩行の行頭に立たない事例の数にほぼ等しく、行中の inti / joh のほとんどすべてが対語の形成に用いられている⁽⁴⁾。なお、備考欄では、別箇所の同一対語ないし類似対語への指示、対語がより大きな二重並列の一部となっている場合の注記、想定されるラテン語原文 (Vorlage) の提示を必要に応じて行なったほか、Otfrid 以外の Ahd. 文献における類似対語、そして Mhd. さらにゲルマン諸語における類似対語を挙げた⁽⁵⁾。

表 2 : Otfrid における inti による半詩行内対語の例証一覧

Nr.	例証箇所	例証 (カッコ内は対語以外の語句、下線は頭韻)	備考 (= は同一対語、→ は類似対語、# は当該半詩行外に及ぶ二重並列、L. は想定される対応ラテン語原文)
1	S-030b	(joh) <u>hus</u> inti <u>hof</u> (gap)	# ... grap / ~ ; mhd. hūs unde hof; afries. hof and hūs
2	1-01-069b	er inti kuphar	# ~, / joh bi thia meina / isine steina
3	1-01-100a	wiser inti kuani	
4	1-02-056b	mina daga inti ellu jar	
5	1-08-010b	(joh) heilag inti guater	# ... fruater / ~
6	1-10-017a	In wihi inti in rihti	L. in sanctitate et justitia (L 1,75)
7	1-11-024a	hus inti wenti	
8	1-16-013a	Dages inti nahtes	= 33; → 188; L. nocte ac die (L 2,37); ahd. tages inti nahtes (T 7,9), tages unde nahtes (Nc 787,11); cf. mhd. tac unde naht, tages unde nahtes, naht unde tac; as. dages endi nahtes; ae. dages and nihtes; aisl. dag ok nótt
9	1-17-065a	Myrrun inti wirouh	# ~ / joh gold scinantaz ouh
10	1-25-030a	suaznissi inti guati	# ~ / joh mammunti gimuati
11	1-27-045a	(Ziu) feristu inti doufist	
12	2-02-038a	wares inti guates	→ 36; # ~ / joh druhtines gimuates
13	2-03-008b	muater inti thiarna	L. (de) matre virgine
14	2-07-074a	herot inti tharasun	
15	2-11-038b	fiarzug inti sehsu	L. XL et VI (annis) (J 2,20)
16	2-12-024a	alter inti fruater	ahd. alte anti fruate (H 16)

17	2-15-012a	(leh in) lib inti guat	# ~ / joh harto frawalichaz muat; cf. mhd. lîp unde guot
18	3-04-008b	siaches inti hammes	
19	3-06-005a	(Fuar) druhtin inti sine	
20	3-06-010b	wib inti gomman	→45, 69, 74 ,145; ahd. gomman inti uuib (T 100,3); cf. mhd. man unde wîp, wîp unde man
21	3-06-040a	alten inti jungen	→70, 75, 136; # ~ / joh selb then wibon allen; ahd. alte unde iunge (Np 148,12/13); cf. mhd. alt unde junc; ae. geongum ond ealdum (Beowulf 72)
22	3-09-012a	salida inti heili	cf. mhd. sælde unde heil
23	3-10-008a	io <u>mer</u> inti <u>mer</u>	cf. mhd. ie mê unde mê
24	3-16-058a	fater inti muater	=26, 27; →109; cf. 1-22-59f. wir unsan fater eren, / joh thia muater tharmit; L. patrem et matrem (J 6,42) ; ahd. fater inti muoter (T 44,23) ; cf. mhd. vater unde muoter, muoter unde vater; as. fader endi moder; ae. fæder and modor
25	3-17-057b	(nu) gank (thu frammort) inti sih	
26,27	3-20-005b, 078a	fater inti muater	= 24; →109
28	3-22-031a	lh inti fater min	= 29; # ~ / joh thiu ewinigi sin; L. ego et pater (J 10,30)
29	3-22-064b	ih inti fater min	= 28
30	4-04-016a	in mammunti int in suazi	
31	4-05-002a	in ferti int in gange	# ~ / joh in thero liuto sange
32	4-07-012a	in hungere int in suhti	L. pestilentiae et fames (Mt 24,7)
33	4-07-084a	dages inti nahtes	=8; →188
34	4-11-045b	(mih) druhtin inti meistar	L. magister, et: domine (J 13,13)
35	4-15-020a	(bin ouh) lib inti war	L. veritas et vita (J 14,6)
36	4-15-040a	(allaz) war inti guat	→12
37	4-17-009a	(Ther)ana scilt inti ana sper	cf. mhd. âne schilt unde (âne) sper
38	4-19-042b	(tho) stuant (er) inti thageta	
39	4-31-012a	(leidor,) ih inti thu	
40	4-33-031b	bluat inti wazar	L. sanguis et aqua (J19,34)
41	5-02-010a	in houbite inti in brustin	
42	5-09-056a	scono inti reino	# ~ / joh harto filu kleino
43	5-16-019a	In himile inti in erdu	→54, 66, 149, 184, 186; L. in caelo et in terra (Mt 28,18); cf. 2-03-010 in erdu noh in himile; ahd. himil enti erda (W 10); cf. mhd. himel unde erde; as. himil endi erða; ae. heofon and eorðe
44	5-16-028a	toufet (sie) inti bredigot	L. baptizantes ... docentes (Mt 28,19f.)
45	5-16-030b	(thaz si) gomman inti wib	→20, 69, 74, 145
46	5-20-043b	herero inti thegan (thar)	
47-49	5-20-073b, 086a,105b	thurst inti hungar	= 51; →104; L. esurivi... sitivi (Mt 25,35.); ahd. den hunger. unde den durst (Nb 143,25); as. hunger endi thurst, thurstu endi hungru; ae. hungor and thirst

50	5-22-008a	ana toth inti ana leid	
51	5-23-078a	thurst inti hungar	= 47-49; →104
52	5-23-126a	reht inti frithu (thar)	L. justitia et pax
53	5-23-273b	lilia inti rosa	
54	5-24-005a	Erthun inti himiles	→43, 66, 149, 184, 186
55	5-24-006a	fehes inti mannes	
56	H-118a	in ubili inti in guati	→88, 89, 105, 165, 183; ahd. ubele unde guote (Np 8,9), guot ioh.ubel (Ni 581,19); cf. mhd. übel unde guot; as. ubiles endi godes; ae. godes and yfeles, yfles and godes

表3：Otfridにおける joh による半詩行内対語の例証一覧

Nr	例証箇所	例証	備考
57	L-080b	mit frewi joh mit heilu	
58	1-01-013a	(Sar) Kriachi joh Romani	
59	1-01-022a	thie lengi joh thie kurti	
60	1-01-042a	zit joh thiuh regula	
61	1-01-055a	(Theist) suazi joh ouh nuzzi	# ~ / inti lerit unsih wizzi
62	1-01-062a	in felde joh in walde	cf. 1-11-014 in felde noh in walde
63	1-01-086a	(thoh) Medi (iz sin) joh Persi	
64	1-01-088a	(sie) in sibbu joh in ahtu	
65	1-01-097b	in snelli joh in wizzi	
66	1-05-024a	erdun joh himiles	→43, 54, 149, 184, 186; # ~ / int alles liphaftes
67	1-06-002a	mit ilu joh mit minnu	
68	1-08-004a	in fluhti joh in zuhti	
69	1-11-007a	(Thaz si) gomman joh wib	→20, 45, 74, 145
70	1-11-009a	Junger joh alter	→21, 75, 136
71	1-11-046a	arma joh henti	→148
72	1-11-052a	(ist ira) lob joh giwaht	
73	1-15-016a	mit dagon joh ginuhtin	
74	1-16-018b	gommane joh wibe	= 145; →20, 45, 69
75	1-16-019a	Alte joh junge	→21, 70, 136
76	1-17-036a	(gab) armer joh ther richo	→79, 117, 161; ahd. Hier arme. unde dâr rîche (Np 11,8); cf. mhd. der arme und der rîche; afries. thene erma and thene rika
77	1-21-016b	mit gote joh mit manne	L. apud deum et homines (Lc 2,52)
78	1-22-062a	in wahsmen joh giwizze	cf. sapientia et aetate
79	1-27-008a	arme joh riche	→76, 117, 161
80	2-01-003a	(Er) se joh himil (wurti)	
81	2-01-026a	engilon joh manne	→185, 187
82	2-01-044a	wialih ouh joh wanne	L. quid et quando (Alkuin)
83	2-02-022a	in eigan joh in erbi	L. in propria (J 1,11); cf. mhd. eigen unde erbe, erbe unde eigen; as. êgan endi erbi

84	2-04-083a	Era joh thiu richi	# ~ / inti manag guallichi; L. regna mundi et gloriam eorum (Mt 4,8)
85	2-04-088a	in <u>w</u> orton joh in <u>w</u> erkon	→126, 128; ahd. miniu uuort ia miniu uuerc (BG), in werchen . noh in uuorten (Np 30,20); cf. mhd. wort unde werc, werc unde wort; as. uuordo endi uuerko; ae. wordum ond weorcum (Beowulf); aisl. orð ok verk
86	2-05-006a	ther jungo joh ther guato	
87	2-05-008a	zi giri joh zi ruame	
88	2-05-018a	(quad) guat joh ubil (wessin)	= 89; →56, 105, 165, 183
89	2-06-022b	guat joh ubil (westin)	= 88; →56, 105, 165, 183
90	2-06-026a	(want er nan) kou joh firslant	
91	2-07-076a	zi zuhti joh zi wizze	
92	2-08-004a	themo wirte joh thero bruti	
93	2-09-097a	(Sie scribent) fater joh then sun	
94	2-11-016a	thiu scaf joh thiu rindir	L. oves quoque et boves (J 2,15)
95	2-11-043a	(Er) lerta (unsih) joh zeinta	
96	2-11-054a	(braht uns) salida joh guat	
97	2-12-031b	ther geist joh wazar (nan nirbere)	L. (natus fuerit ex) aqua et spiritu (J 3,5)
98	2-12-035a	Wazar joh ther gotes geist	
99	2-12-089b	werko joh thero dato	
100	2-13-024b	(thaz) sihit (er al) joh horit	L. (quod) vidit et audivit (J 3,32)
101	2-14-026a	ze liebe joh zi wunnon	
102	2-14-078a	(ouh) scono joh giringo	
103	2-16-004a	thiu wunna joh ouh manag guat	→182
104	2-16-013b	(thie) thurst joh hungar (thultent)	→47, 48, 49; L. (qui) esuriunt et sitiunt (Mt 5,6)
105	2-19-024b	ubile joh guate	=165, 183; →56, 88, 89; L. bonos et malos (Mt 5,45)
106	2-24-016a	in huge joh in muate	
107	3-01-012a	(ih) rehto joh (hiar) scono	
108	3-01-016a	fon eitere joh fon wunton	
109	3-01-044a	(wis) fater (mir) joh muater	→24, 26, 27
110	3-03-015b	gold joh diuro wati	cf. 5-19-045 gold noh diuro wati
111	3-04-042a	er joh sin githigini	
112	3-05-006b	then lidin joh thera sela	
113	3-06-036b	in munde joh in henti	
114	3-06-055b	thero fisgo joh thero leibo	
115	3-07-074a	in <u>m</u> unde joh in <u>m</u> uate	ahd. in muôte unde in munde (Np 51,1)
116	3-09-007a	Blinte joh ouh doube	
117	3-10-022a	richen joh armen	→76, 79, 161
118	3-10-037b	(theist) laba (in) joh ouh helfa	

119	3-13-006a	bispiuan joh bifiltan	
120	3-14-048a	mit fridu joh mit guatu	
121	3-15-042a	mit worton joh mit muate	
122	3-19-035a	(Thaz ist) kusgi joh ouh guat	
123	3-20-050b	(theist) gotes thang joh siner	
124	3-20-068a	thie ubile joh thie dohtun	
125	3-23-010a	(thar) Martha (was) joh Maria	
126	3-24-091b	mit <u>w</u> orton joh mit <u>w</u> erkon	→85, 128
127	3-26-044b	speron joh mit suerton	→134; cf. 1-01-83f. mit suerton, / ... / mit sperron, 4-13-43f Thaz suert .../ ... / odo ouh sper ...
128	4-01-036a	<u>w</u> orto joh <u>w</u> erkes	→85, 126
129	4-06-021b	(er) sluag (sie sar) joh (sie) rah	
130	4-07-035a	(Duit) mano joh thiu sunna	→163 ; L. sol ..., et luna ...(Mt 24,29)
131	4-11-034a	houbit joh thie fuazi	L. non tantum pedes meos, sed et (manus et) caput (J 13,9)
132	4-13-023b	mit <u>mu</u> ate joh mit <u>ma</u> htin	
133	4-15-004a	in got (giloubet) joh in mih	L. (creditis) in deum, et in me credite (J 14,1)
134	4-16-019a	Mit speron joh mit suerton	→127; L. cum gladiis et fustibus
135	4-18-001a	rumana joh ferro	L. a longe (Mt 26,58)
136	4-19-022a	alte joh thie junge	→21, 70, 75
137	4-22-016a	(quad war in) liob joh suazi	
138	4-22-034a	in slegin joh in worton	
139	4-23-006a	bithurnter joh bifilter	
140	4-23-038a	in lib joh tod (hiutu)	
141	4-26-042a	(thaz) sela joh thaz herza	
142	4-27-008a	mit fuazin joh bi hanton	cf. as. thuru is hendi endi thuru is fuoti
143	4-27-022a	obana joh nidana	
144	4-31-015b	in thorfon joh in burgin	ahd. in thorph inti in burgi (T 125,9), in burgi inti in thorf (T 80,1)
145	4-31-016a	gommane joh wibe	= 74; →20, 45, 69
146	4-35-016a	erdun joh thes sewes	
147	4-37-026a	mit scazzu joh mit worton	
148	5-01-020a	thie arma joh thie henti	→71
149	5-01-028a	in erdu joh in himile	= 184, 186; →43, 54, 66; # ~ / inti in abgrunte ouh hiar nidare
150	5-02-016a	giwuntot joh firdamnot	
151	5-03-006a	in lichamen joh muate	
152	5-03-007b	ougen joh thie fuazi	
153	5-03-010a	houbit joh thio <u>h</u> enti	cf. henti inti houbit (T 155,5), Houbit unde hende (Nk 388,14)
154	5-03-014a	in herzen joh in datin	

155	5-07-022a	ser joh leid (ubar wan)	
156	5-07-063b	(er) got joh iro fater (ist)	
157	5-08-002a	thie sconun joh thie wizun	
158	5-08-030a	gisuaso joh thin kundo (ist)	
159	5-13-018a	zi stade joh zi sante	
160	5-13-026a	mit minnu joh mit willen	
161	5-16-029a	Arme joh thie riche	→76, 79, 117
162	5-17-009b	giwalt joh gotes krefti	
163	5-17-025a	Thia sunnun joh then manon	→130
164	5-19-053a	skalka joh thie riche	
165	5-20-022a	ubile joh guate	= 105, 183; →56, 88, 89
166	5-20-030a	mit fleisge joh mit felle	
167	5-20-063a	Hanton joh ouh ougon	
168	5-21-024a	ser joh smerzun (ubar dag)	
169	5-22-002a	thie rehte joh thie guate	L. justi (Mt 25,46)
170-175	5-23-012a, 080a, 096a, 106a, 116a, 146a	lichamon joh sela	= 178
176	5-23-150a	in herzen joh in muate	cf. mhd. (im) herze unde muot
177	5-23-151a	Suht joh suero manager	
178	5-23-158a	lichamon joh sela	= 170-175
179	5-23-198a	lira joh fidula	
180	5-23-199a	Harpha joh rotta	
181	5-23-217b	ana sorgun joh ser	
182	5-23-291a	(Theist) thiu wunna joh thaz guat	→103
183	5-25-080b	(sint) ubile joh guate	= 105, 165; →56, 88, 89
184	5-25-095a	In erdu joh in himile	= 149, 186; →43, 54, 66
185	5-25-096a	mit engilon joh mannon	= 187; →81
186	5-25-103a	In erdu joh in himile	= 149, 184; →43, 54, 66
187	5-25-104a	mit engilon joh mannon	= 185; →81
188	H-168a	(thie) dages joh nahtes (thuruh not)	→ 8, 33

以上の例を概観すると、まず、いくつか現代ドイツ語でも用いられる対語（その語史的連続性はさておき）が目につく。主なものを挙げると、1. hus inti hof (Haus und Hof)、21. alten inti jungen (alt und jung)、24. fater inti muater (Vater und Mutter)、76. armer joh ther richo (arm und reich) などである。ただ、仔細に見ると現代語とは配列が逆であったり、意味・用法が異なるものも少なくない。ここでは、語の配列を中心に、Otfrid における対語の特徴について考察する。

まず、21. *alten inti jungen* およびその類例であるが、これは今日では *alt und jung* および *jung und alt* の両方の形で用いられる⁽⁶⁾。一方、Otfrid では3例 (21, 75, 136) が *alt und jung* の配列、1例 (70) が *jung und alt* の配列となっている。対語では、一般に（とは必ずしも言えないかもしれないが少なくとも多くのヨーロッパ語では）重要性の高いものが前に来ると考えられる (Krause 1922: 88ff. が言う *das Moment der Wichtigkeit* あるいは *Prinzip der absteigenden Linie*)。alt と jung のどちらを重んじるかは文化や時代によって異なるが、ゲルマン世界では古来老齡と知恵は等号で結ばれる関係にあった。そのことは Otfrid が使用しているもう1つの対語 *alter inti fruater* (16)、あるいはそのよりゲルマン的な例証である *Hildebrandslied* の *alte anti fruote* からも見て取れるし、*fruot* „weise“ に対応する *As.* の *frōd* が単独で „alt“ の意味を持つに至った事実にも裏付けられる。そこで、Otfrid の4例中3例が *alt und jung* の形を取っているのを、この価値観の反映であるという解釈をしたい気持ちに駆られるわけだが、前章でも述べたとおり、Otfrid は韻文であり、語の選択にも脚韻の要請が関与してくる。実際、4つの対語の第2要素は例外なく前半詩行末にあって、後半詩行末と脚韻を踏んでいる。とはいえ、ドイツ最古の脚韻詩である Otfrid の押韻は Mhd. のそれに比べれば非常に不完全なもので、母音韻はもとより、語尾のみでの押韻も頻繁である。たとえば、70. の *alter: gizalter* は申し分のない脚韻であるが、21. の *jungen: allen* では語尾 *-en* のみの押韻となる。これならば *alten* を後ろに持ってきて *alten: allen* と踏んだ方が母音韻となりむしろ美しかったかもしれない。このほか、ラテン語の影響を考慮すべきことも上述したとおりであるが、当該の4箇所に関しては、下敷きとなった原文は確認されておらず、特に70. と75. の2例は著者自身の言葉で綴った序章における例証である。この対語は、現代語の *alt und jung* と同様に、実質上 „alle, jedermann“ を現す慣用表現として使われていたのかもしれない。このような諸事情を踏まえると、配列としても *alt* が先置されるのが Otfrid、ひいては Ahd. における自然なパターンであったと想像できるが、それはあくまで想像である。質的・量的に極限された資料から、致し方ないことではある。

もう1つのケースを見てみよう。20. の *wib inti gomman* およびそれと逆配列である45. の *gomman inti wib* ほかに3例 (69, 74, 145) である。ここでも、伝統的に重んじられてきた *gomman* „Mann“ が *wib* „Frau“ に先置されているケースが大半を占めている。押韻に関しては、*gomman* は *gizam* と母音韻を、4例の *wib(e)* は例外なく *lib(e)* と完全な脚韻を形成している（ちなみに、この押韻は Mhd. の韻文でも定番である）。20. の *wib* 先置が脚韻の要請による例外的なものなのか、あるいは、こちらの配列も Ahd. として自然なものであったのかは判断しがたい。少なくともラテン語の影響はなく、聖書の *multitudo magna* に対応する *mihil woroltmenigi* „große Menschenmenge“ のパラフレーズと見なされる。この配列を支える土台として、もう1つ考えられるとすれば、それは長文肢後置の法則 (*Gesetz der wachsenden Glieder*) であるが、

„Mann und Frau“のパターンがすでに長らく慣用化されていたとすれば（これも仮定であるが）、それを敢えて破ってまでこの「法則」が自然 (spontan) に効力を発揮したとは思えない。脚韻の要請か、慣用を破ることによる詩的效果がねらいか、まさか political correctness の先駆けではあるまいが⁽⁷⁾。

(続く)

付記：古高ドイツ語の表記は一次資料に挙げた刊本に従い、原則として長音表記は付さなかった（一方、不統一ではあるが中高ドイツ語には長音表記を付した）。また、Otfrid の揚音部を示すアクセント記号は略した。

注

- (1) 他に ja (本来間投詞で古ザクセン語 ja、古英語 ge に対応) が並列接続詞として存在したが、例証が僅少で、Otfrid をはじめとする Ahd. の主要文献には一切現れない (Karg-Gasterstädt/Frings: Bd.4, Sp.1722 参照) ので、小論では扱わない。
- (2) Got. の母音 o に対して Ahd. で a が現れている点に関しては Braune/Eggers 1987: 26 参照。ただ、joh を Ahd. において ja と ouh (>Nhd. auch) の融合により成立したもの（あるいはそのように解釈しなおされたもの）と考えることも可能である。現に jouh という語形（語？）も例証されているが、バイエルン方言に限られる (Karg-Gasterstädt/Frings: Bd.4, Sp.1822 参照)。
- (3) 日本語の二重並列文で、小さな単位の並列に「および」、より大きな単位の並列に「ならびに」を用いるという区別は、主に官庁・法律文書においてなされる。本多久美子：法律文はいかに書かれるか、言語処理学会第9回大会 (2003) <http://www.aoni.waseda.jp/khonda/paper/NLP-2003.pdf> (2008年9月27日現在)、および (!)、井上ひさし：ニホン語日記、文春文庫 1996、238 ページ以下参照。
- (4) 行中であって半詩行内対語を作らないケースは、inti に関しては 2-14-096 と 5-14-024、joh に関しては 5-12-089 と 5-23-265、の各2例のみであった。逆に、半詩行の行頭にある inti/joh が対語を作るケースは時々見られるが、これらは当然「半詩行内対語」ではないので表には算入せず、必要に応じて備考欄で言及するに留める。また、接続詞 noh および odo による若干数の対語も場合により注記する。
- (5) ここでの、Otfrid 以外の Ahd. の用例、Mhd. およびゲルマン諸語における用例の記載が決して網羅的でないことをお断りしておく。なお、ラテン語聖書の出典記載は Nestle/Aland: Novum Testamentum Graece et Latine. Stuttgart 1984 の略語による。Ahd. の出典は基本的に Schützeichel 2006 の略語を用いたが、Notker については Karg-Gasterstädt/Frings の記載方に従った。また、As. の出典はすべて Heliand である。他の諸言語の出典は一部例外を除き記さない。
- (6) 筆者は alt und jung がふつうだと思っていたが、Yahoo Deutschland で検索すると、“alt und jung” が 148 万件、“jung und alt” が 761 万件ヒットした (2008年10月1日現在)。なお、Duden. Deutsches Universalwörterbuch. Mannheim 2007 には Alt und Jung (新正書法で大文字書き) のみ記載されている。
- (7) ここでも Yahoo Deutschland で検索してみた。“mann und frau” が 3300 万件、“frau und mann” が 881 万件ヒットした (2008年10月1日現在)。

一次資料 (Ahd. のみ記載)：

Otfrids Evangelienbuch. Hg.v. Oskar Erdmann/Ludwig Wolf. Tübingen (Niemeyer) 1973.

Der althochdeutsche Isidor. Hg.v. George A. Hench. Straßburg (Trübner) 1893.

Tatian. Hg.v. Eduard Sievers. Paderborn (Schöningh) 1892.

Die Werke Notkers des Deutschen. Hg.v. James C. King u. Petrus W. Tax. Bd.1-10. Tübingen (Niemeyer) 1972-1996.

Die kleineren althochdeutschen Sprachdenkmäler. Hg.v. Elias von Steinmeyer. Dublin/Zürich (Weidmann) ¹1971.

辞典・コンコーダンス：

Anderson, Robert R./Goebel, Ulrich/Reichmann, Oskar: Frühnhd. Wb. Berlin (Gruyter) 1989ff.

Eggers, Hans: Vollständiges lat.-ahd. Wb. zur ahd. Isidor-Übersetzung. Berlin (Akademie) 1960.

Friedrich, Jesko: Phraseologisches Wb. des Mhd. Tübingen (Niemeyer) 2006.

Karg-Gasterstädt, Elisabeth/Frings, Theodor u.a.: Ahd. Wb. Bd.1ff. Berlin (Akademie) 1952ff.

Kelle, Johann: Glossar der Sprache Otfrids. Regensburg (G. Joseph Manz) 1881.

Kluge, Friedrich/Mitzka, Walther: Etymologisches Wb. der dt. Sprache. Berlin (Gruyter) ²⁰1967.

Kluge, Friedrich/Seebold, Elmar: Etymologisches Wb. der dt. Sprache. Berlin/New York (Gruyter) ²¹2002.

Lexer, Matthias: Mhd. Handwb. 3 Bde. Nachdruck. Stuttgart (Hirzel) 1974. [¹1872-78]

Schützeichel, Rudolf: Ahd. Wb. Tübingen (Niemeyer) ⁴2006.

Shimbo, Masahiro: Wortindex zu Otfrids Evangelienbuch. Tübingen (Niemeyer) 1990.

参考文献：

Behaghel, Otto: Deutsche Syntax. Bd. 3. Heidelberg (Winter) 1928.

Braune, Wilhelm/Eggers, Hans: Ahd. Grammatik. Tübingen (Niemeyer) ¹⁴1987.

Erdmann, Oskar: Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otfrids. 2 Teile in 1 Band. Nachdruck. Hildesheim (Olms) 1973. [¹1874-76]

Jeep, John M.: Alliterating word-pairs in Old High German. Bochum (Brockmeyer) 1995.

Krause, Wolfgang: Die Wortstellung in den zweigliedrigen Wortverbindungen. KZ 50 (1922) S.74-129.

Lockwood, W. B.: Historical German Syntax. Oxford (Oxford University Press) 1968.

Matzinger-Pfister, Regula: Paarformel, Synonymik und zweisprachiges Wortpaar. Diss. Zürich 1972.

Stutz, Elfriede: Spiegelungen volkssprachiger Verspraxis bei Otfrid. In Bergmann u.a. (Hgg.): Althochdeutsch. Bd.1. Heidelberg (Winter) 1987. S. 772-794.

von Lieres und Wilkau, Marianne: Sprachformeln in der mhd. Lyrik bis zu Walther von der Vogelweide. München (Beck) 1965.